

# 「佐賀大学電子計算機室」

文化教育学部教科教育講座

森田 譲

「佐賀大学電子計算機室」、この名前をご存じの方は少ないのではないかと推察される。ここでは、佐賀大学附属研究施設として、初めて運用が始まった“計算機センター”の歴史を振り返ってみたい。

佐賀大学共同利用計算機センターとして初めて誕生したのが「佐賀大学電子計算室」であり、これは昭和45年(1970年)4月から暫定的な使用が始まり、9月から佐賀大学共同利用研究施設としての正式な運用が始まった。場所は科学技術共同開発センターの前にある現在の機器分析センターである平屋の建物であった。このとき使われた電子計算機は富士通製のF270-20である。昭和46年2月の電子計算機室ニュースNo.4によると、

ユーザ使用容量	コア数	13KW
	ドラム数	36.5KW
1ステートメントの使用コア数		平均20W

とあり、この点に留意のうえプログラムをお組みくださいとある。「コア」とはフェライトコアの意味であり、当時は記憶素子として、直径数ミリの磁石が使われていたのである。1W(Word、1語)を4バイト(B)として、主記憶容量は52KB、補助記憶容量は146KBとなる。補助記憶装置は磁気ドラムであった。これに比べて、現在のパソコンは主記憶容量で、約千倍となり、補助記憶容量では約8万倍であり、大きさでは千分の1以下になっている。この計算機を使い入試電算処理が始まっているのは驚きである。

この計算機が10年間使用された後、昭和55年(1980年)に富士通製のM150-Fが導入されて、「佐賀大学電子計算機センター」として現在の場所に新しい建物とともに生まれ変わるのである。この計算機は主記憶装置2MB、補助記憶装置135MBの高性能を持っていた。当時の電子計算機センター主事、岩重氏(現在福岡工業大学教授)のもと、彼の精力的な運用とともにこの計算機は大いに利用された。当時の利用方法は従来のパンチカード方式とTSS(時分割システム)方式であった。しかし、電子計算機センターに向く不便さと利用の混雑さに電子計算機センター離れが始り、パソコンの利用が始まった。岩重氏の転出にともない、昭和60年(1985年)から私が電子計算機センター主事として務めることになった。昭和55年(1980年)はパソコン元年ともいわれ、情報化社会の始まりを告げる年でもあった。当時のパソコンは100万円くらいし、あまり普及はしなかったが数年すると30万円台になり、誰もが手に入れることが可能になった。これとともに、電子計算機センターの利用は激減し始めた。

私の主な任務はいかに電子計算機センターの利用を増やすかであった。し

かし、利用は減る一方であった。私は初級者講習会や入門講座を開いて少しでも計算機使用料収入を増やす努力を続けた。これらの講座はいつも満員であった。このほかに現在の計算機を更新し、高性能の計算機を設置し、利用者呼び戻すことであった。現状分析から将来計画までの膨大な資料を小野技官の協力を得て作成し、文部省に提出した。そして、事務官の方とともに文部省を訪れ、「情報処理センター」設置への好感触を得たのは昭和62年のことであった。私が務めたこの2年半は多くの人がパソコンの利用を始めたターニングポイントに当たっていたのであろう。

そして、昭和63年に「佐賀大学情報処理センター」が設置され、私の後任の福井先生のもと現在の隆盛をほこるセンターが運用を始めたのである。福井先生はこれまでの重厚長大の汎用機に別れを告げ、ネットワークの構築に便利なワークステーションを積極的に導入した。平成5年には演習室が増築され、全学教育センターの発足とともに、情報処理科目が必修科目として課され、情報処理教育の拠点として、重要な役割を果たすようになった。この実績が認められ、「大型計算機センター」に次ぐ規模を持つ「学術情報処理センター」が発足をしようとしている。“計算機センター”の歴史は佐賀大学の歴史そのものであるように思われる。